

2018年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金 調査報告書

課題名：多文化共生と同化をめぐるポリティクス—移民支援のエスノグラフィーに向けて

グローバル・スタディーズ研究科

国際関係論専攻博士後期課程2年

伊吹 唯

1. 研究課題

本研究では、複数の移民集住地域を事例とし、地域社会において多文化共生と同化がどのように交錯しているかを実証的に論じる。

移民の受け入れのあり方については、同化主義か多文化主義かという二項対立的な議論が展開されてきた。そもそも、移民は、ホスト社会に同化していくといわれていた（例 Park & Burges 1921, Gordon 1964）。しかし、居住国の国籍を持たない人々にも市民権を与えるべきだという内外人平等原則を背景とし、多文化主義が欧米を中心に広く共有されるようになった（例 Kymlicka 2001）。

日本社会においても、戦後の在日朝鮮人や80年代の中国帰国者の社会統合は、同化主義的に行われていた（山脇 2001, 山田 2007）。しかし、戦前の同化主義への反省や80年代の多文化主義の流入などにより、同化主義が批判されるようになった（蘭 2011）。多文化主義は、95年の阪神淡路大震災をきっかけに「多文化共生」という言葉で市民にも普及し、地方行政によっても多文化共生を旗印とした施策が行われ始めた（山脇 2009）。

しかしながら、時代によってどちらの方がより勢いがあるかの違いはあるものの、実は、多文化主義と同化は常に併存してきたように思われる。日本においても、新自由主義のもと、高度人材や人手が不足する分野の労働者を選別的に受け入れる一方、「不要」な移民は排除されることが指摘されている（塩原 2010）。このように、常に同化と多文化主義のせめぎ合いは続いてきた。

そこで、申請者は、移民に対する支援の現場において多文化共生と同化が矛盾しながらも併存する状況を、エスノグラフィックに記述していくことにした。そして、地域社会における多文化共生と同化のせめぎ合いが普遍的であることを明らかにするため、複数の移民集住地域の調査も行っていく。移民の集住地域における多文化共生と同化の複雑な関係とその普遍性をエスノグラフィックに記述することを本研究の目的とした。

2. 研究内容

今年度は研究助成金をいただき、主に以下の3つの調査・研究活動を行った。以下、各活動について報告する。

① 長野県飯田市フィールドワーク

長野県飯田市は、受給者が博士前期課程 1 年次からフィールドとしてきた地域であり、本調査の中心となる地域である。

- 8月3日(金)～7日(火)

8月3日(金)日中は図書館で資料収集を行った。特に、中国帰国者関係の地方紙記事や資料を収集した。夜には、飯田市内の日本語教室の元担当者にインタビューを行い、日本語教室との関わり方や関わるようになった経緯について聞き取りをした。4日(土)に飯田市で飯田りんごんというお祭りが開催され、飯田国際交流推進協会がブースを出展した。そのブースの手伝いをしながら参与観察を行い、飯田市の人々の協会に対する反応を観察し、また、協会や飯田市における国際交流、多文化共生についての情報収集を行った。5日(日)午前中は図書館で地方紙記事の収集を行った。この日も3日から継続して、中国帰国者についての記事を中心に収集した。午後は飯田市の日系ブラジル人コミュニティのリーダーへのインタビューを行い、ライフストーリーの追加の聞き取りを行った。6日(月)は、飯田国際交流推進協会の会長(当時)に聞き取りを行い、協会発足の経緯やそれからの沿革を話していただいた。また、6日夜は日系ブラジル人の人たちが集まるズンバ教室の参与観察を行った。

- 12月8日(土)～12日(水)

12月9日(日)に開催された飯田国際交流の夕べに参加し、情報収集、ネットワーク構築を試みた。このイベントは、飯田市における外国人住民関係の最大のイベントであり、地域の外国人住民が多く集まるイベントである。その場で、新たに2名とインタビューの約束をし、翌日以降にインタビューを行った。また、9日の夜には、市内で元ALTとして働いていた男性へのインタビューを行い、来日までのライフストーリーを聞き取った。10日(月)は飯田女子短期大学の菱田博之先生と飯田市の多文化共生に向けた取り組みに関して情報交換を行った。10日夜は、下伊那郡で元ALTとして働いていて、現在は一般企業に勤めている男性に対するインタビューを行い、ライフストーリーを聞き取り、地域に今も住んでいる理由などを聞き取った。11日(火)は日系ブラジル人の女性が経営しているブラジル菓子の工場を観察し、経営者の女性の話を聞き取った。また、同日夜には、9日夜にインタビューした元ALTの男性に追加インタビューを行い、来日後のライフストーリーを中心に聞き取った。12日(水)は、日系フィリピン人三世の女性にライフストーリーを聞き取った。特に、なぜ飯田に留まっているのかという点を中心に聞き取った。

- 2月2日(土)～5日(火)

2月3日(日)に開催された日本語教室わいわいサロン2の学習成果報告会に参加し、日本語学習者が作成した「わたしのふるさと」というテーマのデジタル・ストーリー・テリング(DST)の作品を鑑賞し、その後の交流会に参加した。DST作品では、日本語学習者のライフストーリーの一部が語られるため、この報告会に参加した。また、交流会では、地域の工場で働くベトナム人実習生や日系ブラジル人の参加者と交流し、今

後の調査のためにネットワーク構築を行った。4日(月)夜は日本語教室わいわいサロンのクラスに参加し、参与観察を行った。この日に集まっていた日本語学習者の1名に対して次回訪問時のインタビューを依頼し、承諾を得た。5日(火)は飯田市立中央図書館で地方紙の記事収集と資料調査を行った。今回は、主に飯田下伊那地域の在日コリアンについての記事や資料を中心に収集した。

② いちよう団地(神奈川県)フィールドワーク

いちよう団地の調査は、いちよう団地だけではなく、その周辺地域に暮らす外国人にも聞き取りを行っている。

● 6月17日(日)

いちよう団地在住者が多く参加する大和市の日本語教室の参与観察を行った。教室の代表者に教室の発足経緯を聞き、レベルごとに分かれたクラスのそれぞれを案内していただいた。

● 11月30日(金)

いちよう団地周辺の座間市に居住する日系ブラジル人の女性のライフストーリーを聞き取った。特に、彼女の子どもの教育についての思いを中心的に聞き取った。

● 12月2日(日)

大和市の日本語教室に通っていた日系ブラジル人の男性からライフストーリーを聞き取った。彼と彼の家族が日本とブラジルの間を行き来してきた経緯や、現在日本に暮らしている理由を中心的に聞き取った。

● 12月5日(水)

いちよう団地に居住するベトナム難民の男性にライフストーリーを聞き取った。インタビューのなかでは、来日の経緯や子どものころの日本での生活、仕事のことなどに加えて、将来的にどこで暮らすつもりかなども含めて聞き取った。

③ 学会・研究会参加

● 7月8日(日):第1回ライフストーリー講習会

日本のライフストーリー研究の第一人者である桜井厚先生が主宰するライフストーリー研究会の講習会の1回目であり、主にライフストーリーとはどのようなものかやこのような研究手法が使われるようになった経緯などについての講義を聞いた。その後、参加者と共にディスカッションを行った。

● 9月15日(土)～16日(日):日本社会学会参加(出張期間は14日(金)～)

甲南大学岡本キャンパスで行われた第91回日本社会学会に参加した。特に、エスニシティや移民に関する部会、また、研究倫理に関する部会に参加した。また、15日(土)夜には、1月に企画者として開催したグローバル・スタディーズ研究科若手研究者イニシアティブによるシンポジウム「移民の社会統合の理念と現実—後発国の比較研究」の報告者4名で打ち合わせを行った。これは、4名のなかに関西居住者がおり、普段東京で全員が集まることが難しいためである。加えて、16日(日)午後には神戸市にある

海外移住と文化の交流センターを訪問し、この地にかつて存在した国立移民収容所の歴史やここから送り出された移民について調査した。

● 11月11日(日)：第2回ライフストーリー講習会

ライフストーリー講習会の第2回に参加した。この回では、ライフストーリーの解釈方法の1つである対話的構築主義の基本的な考え方についての講義を聞き、その後ディスカッションを行った。

3. 研究成果

①飯田調査の成果の一部は、これまでの調査の成果と合わせて、1月のシンポジウムにおいて口頭報告を行った(「エスニック移民から考える社会統合—『日本人』と『外国人』のはざままで」)。そこでは、日系ブラジル人のライフストーリーから、エスニック移民である彼が、日本社会との緊張関係のなかで「日本人性」と「外国人性」を上手く使い分けていることを論じた。この報告をもとに、来年度にはグローバル・スタディーズ研究科のオンラインジャーナル『AGLOS』に論文を投稿する予定である。また、③で記したライフストーリー講習会におけるライフストーリー研究の方法についての議論を参考に、飯田調査の成果の一部を論文として『オーラルヒストリー研究』に投稿予定である(3月末締め切り)。加えて、飯田調査の成果の一部をまとめた論文を *International Journal of Japanese Sociology* に年度内に投稿予定である(英語論文)。

②いちょう団地の調査については、今年度から本格的に開始したものであるため、現時点では研究成果を出すことはできていない。しかし、今年度調査費の助成をいただき調査を進めることができたため、来年度以降その成果を口頭報告や論文として発表していきたい。